青山御流 活花手引種後篇 二

ヲ多9
2848
10-7

門 多 8
横 2848
10-7

宮内省圖書寮

紅牧丹
青蓮帽紫芸離
被之硯紙金

寵玉鏹春萬
壽天尚風不
不曾去
壽三之春三月吉

義賢

活華手引大全巻之二

壽栄園水谷有雅著
男　錦亭亭逸雅校

懸瓶花体本源之事

○懸瓶の花体ハ本源置瓶の行ひ花体より變化〳〵ちがひ所ちがひ。真の体なり。行草のゝ体なり。故ゆゑ置瓶の花体を正格とし。懸瓶の風姿を権格とせり。されば大書院床。或ハ貴人招請の節等ハ必置瓶ゆゑ限るべきなり。又懸瓶ハ小座敷茶室獨樂等の節。其時宜ゆゑよろしく用ゆべし。

尚會席抔ハ殊ゆゑ其集列の位置ゆゑて取合ゆゑ

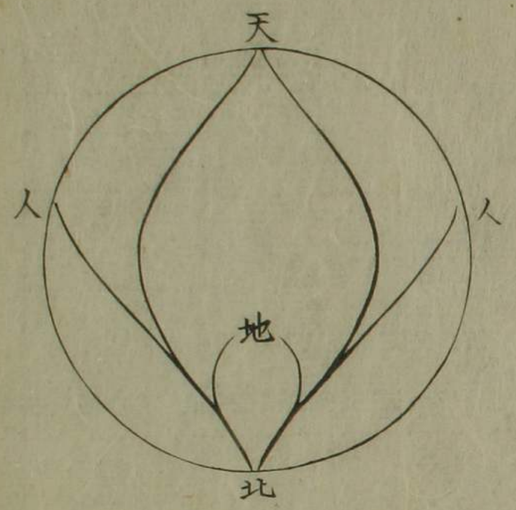
御當流懸瓶の規則ハ何とて正風雅整の本格より轉化なせるなれば是を學ぶゆゑ先置瓶の花を習熟〳〵後懸瓶の花を修錬

すべきなり。

よく〳〵懸瓶の花ハ手輕きなれども正格なる置瓶の花を先ゆゑ

まづきなれば。

○置瓶行之規則陰陽骨体之圖

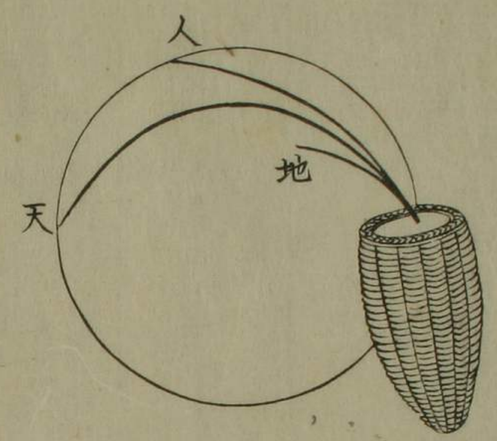


御當流花体の規格ハ其根元を北ゆゑ配し。是萬物自然の理也。故ゆゑ右旋左旋の形狀をなし〳〵。陰陽の花体爰ゆゑ本源を顯す。

此体西南東北ゆゑ旋る則右旋の姿ゆゑ〳〵陰也、草木蔓艸をはじめ萬物皆此旋の方陰性なり、非勝手といふ但陰の床ゆゑ置位なり　此陰の床〳〵ハ逆勝手の床なる事也、

此体東南西北ゆゑ旋る則左旋の姿ゆゑ〳〵陽也、本勝手といふ但陽の床ゆゑ置位なり、陽の床〳〵ハ本勝手の床なる事也、

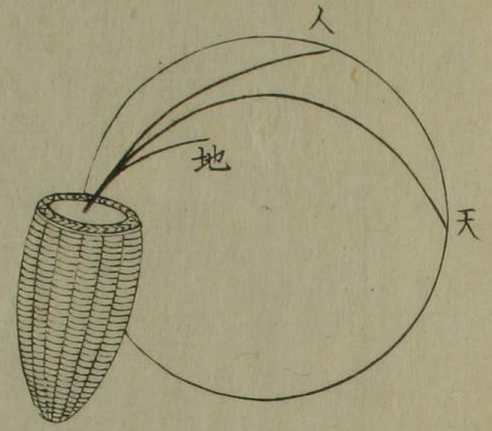
右置瓶陰陽の花体と轉じ懸瓶の体となる是則経緯の理なり。
すべて天地間に行なわれ有るの皆此経緯のそなへ合離反對の有るのごとく。
置瓶の花体いとなり。又懸瓶の花体はぬきたて。両体則横立の反對と知るべ
また本勝手と非勝手の花形は順逆の反對なる所也 尚経緯反對は傳多事繁なれば爰に贅せず



懸瓶非勝手之圖 置瓶の非勝手と轉じ靡く形状なり

此体右旋の姿は陰也即逆勝手の床を
挿べし

右旋左旋は体用の差別あり体は草木自然をいう用は人の視る所をいふ也体の左旋なるものを
用ゆる見れば反対に右旋と見え体の右旋なるものを
用ゆる見れば反対に左旋と見ゆる故に是と誤る
ものの有今此圖は本体の左右旋なり萬物皆是
に等しく思ひ迷ふべからざる



同本勝手之圖 置瓶の本勝手を轉じ靡く形なり

此体左旋の姿なり陽なり即本勝手の
床なり挿べし

水際の振様両体ともに置瓶の花体と変ずるなり又花枝の疎密は應じ三枝五枝或は
七枝に配し屈伸変化限なきものの也

凡懸瓶の花体の旨趣とする深山高岳の巖崖そばだちたる所に
生成せる草木の自然に枝葉を垂れ或は蔦かづらの生下るなる形容を本
據とし僻郷離屋の閑庭に這ひまつわりて松のばらに藩籬になびき打
越したる姿なども摸したるものなれば其梢の長じたるを靡く下に

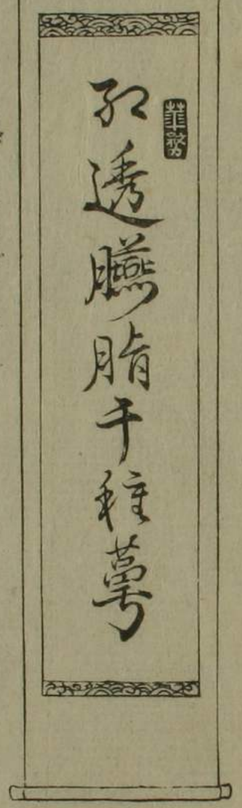
有るを即一体の主枝なり是を懸瓶の体なりとして長ずるを梢を
さして天の枝と稱するなり。それ天を虛空といひ又日といふ天を上を
けてつひ地を下をさしていふ事和漢古今の常則なれど天の地を覆ひ
日の地球を運旋する視動説なりといふ時は高山に登りて日の出入を
眺望するに我居所よりは遥の下にこれを見る又平居して是を眺めて
横斜に見ゆ然るに日光漸高く昇り盛大なるの時に至りては何も
よりも是を頂上に見るなり故に活華の正格は此規を則として三才を
置まつる懸瓶は権格なるがゆゑに正格に反して日光を下に眺て横
斜に見るの則を以て規とせざれば屈曲して下に垂れ伸て横斜に
靡くなり天の枝といへる事當に此理によれるを知るべし

懸瓶行草六体之事并變化六体之圖

○懸瓶の花体は行に三体草に三体の規則あり行の三体とは
相靡載靡逆靡の三段なり又草の三体とは大流一惣流一亂流一
の三段なり此六体を熟得すれば何にでもなれば枝ぶり
も自在に花体の調ふものなり また懸瓶は竹器銅器籠甑
等の數品なりなれども異形のものもあれど右六体の活動を手錬
して花器の相應する所を專一に心得べし但竹器は細き切方はさまざまの姿有て
銅器籠甑等形容さだまりがたし されば左に行草六体の圖はいさゝか骨法の瓶
器に相應する所の大綱を示すのみなり 猶草木の活形疎密屈伸
等は花枝を以て辨へざれば委しく明らかなる所なり 但し懸瓶の圖は早

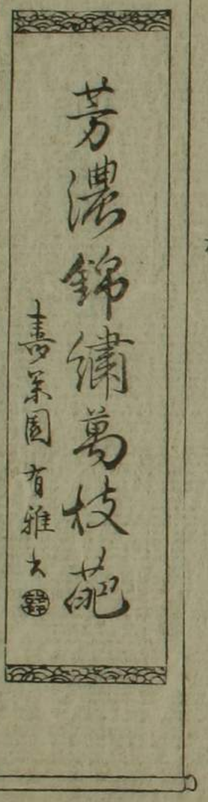
さゝ一五編の附錄ふ
數体とゆゝ置つ

懸瓶い先ふいつる如く、権格ゆゝ畧儀なれい正禮の節抔用ふべき
ものふゆゝ花ゝ、小座敷の釣床、或い平床（平床ゝいゝ置床のゝゝ床柱い通ゝかべよ附たるとゆふ也、）
抔ゆゝ來客多く花瓶床の上ふ居らざる時よゝきゝ二幅對等
の中央ふ懸花のゝと用ひゝ大畧ゝる事ゝ有ゝ、其節い登り
相靡ゆゝいゝ体を挿べゝふ相靡の一格なるが、此体ふ限ゝて三才を
正格のゝゝ置事、深き口傳ゆり、鼎祝儀向等ふ懸瓶を用ふる
時いかゝゝ此登りの体ふ挿事なゝひなり



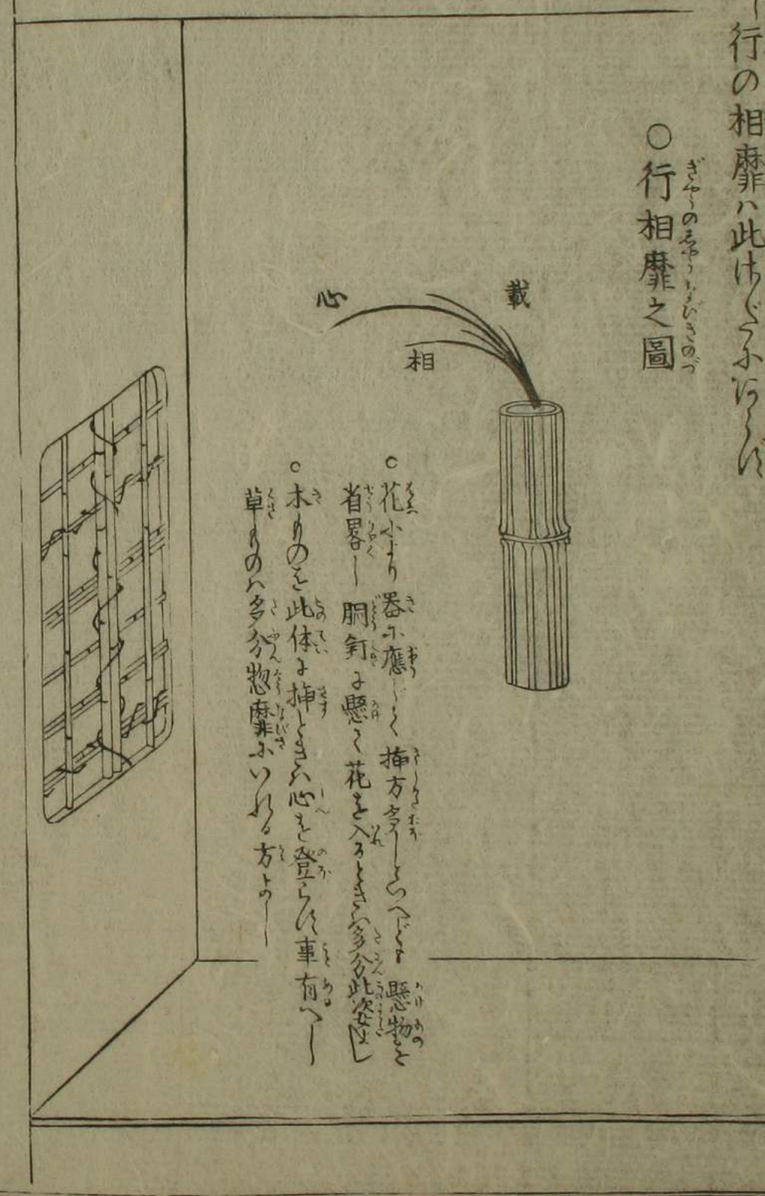
○登り相靡之圖

圖のゝゝ二幅對の中央ふ懸瓶ゝて入る時此体ふ限るの也、但懸瓶ハ坐て見るゝ定格ゆゝ見ゆるゝのなれい心の乗前へ靡ゝ挿度習ゝ知るべゝ



右登ニ相靡ヲ懸絶の内の別格ヲ〻真ヲ通ぜるの体なり故ヲ本勝手非勝手〻〻ヲ置絶の格ヲ准ぜ又心の捕ハ正面より見る根元ヲ納る様ヲ挿べし但〻行の相靡ハ此けぐふ〻〻

○行相靡之圖



○花ハ器ヲ應〻〻挿方多し〻〻へ〻〻懸物を省略〻〻胴釘ヲ懸〻花を入るゝ〻〻多分此姿なし

○木りのを此体ヲ挿〻〻ハ心を登ら〻〻車有へし草りのハ多分惣靡ヲいれる方よし

○載靡之圖

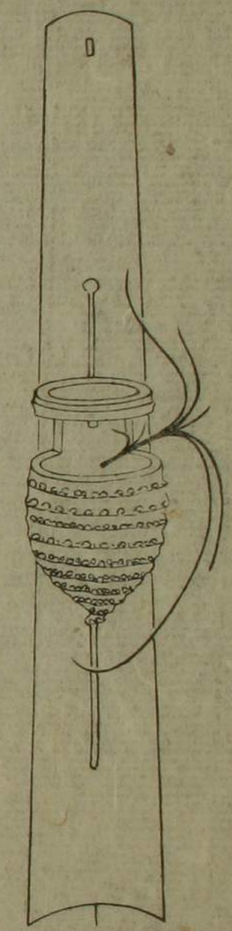
載靡ヲ懸絶専要の規格ヲ〻〻〻木りの草りの共ヲ此花体ヲ挿〻〻〻花器〻〻大槩取合ふりのなり

但横懸ヲ〻〻正面懸ヲ〻〻此骨体ヲ習手錬〻〻〻

山吹萩の類此体ヲ入るゝ〻〻風情なし

右床柱の釘ヲ横掛ヲ〻〻挿〻〻〻花枝床ぶちより前へ出ざる様心得ぐ〻〻心の捕ヲ懸りの〻方へ振〻〻〻挿ヲ趣意ちれど〻花枝の模様ヲよりて〻少〻〻前へふりて〻苦〻〻〻〻但〻床様を限ア〻と〻るなり

○逆靡之圖



曲撥ト云

此花体ハ長き姿の花器又口の廣きもの抔ふ入る事不取合なり。口のせばき器ふ挿く。風情格別おもむき有なり

圖ニする所の曲撥ハ張床又ハ會席等ふ用ふるもの也張床ハ是非曲撥なくて�shiなり

右行の三体并登り相靡等の規則ハ何れ木もの草ものとふ勢ひ有るもの〳〵風情あ〳〵尚性容ふ應じ聊差別有也最此修錬肝要なる

だ〳〵又蔓もの類九〳〵大靡のものハ次ふ圖する草の三体を以習熟すべし

○草之大流之圖

○總流之圖

○次条ふ云柳釘より入たる圖なり凡く長く垂るものハ此挿りふ准ずべし

○總流ハ前隅吸隅の間ふ出く枝先自然のまゝふ靡き登り勢つる枝ぶきをつかり

但し自然の曲枝等有ときハその風情見くるべし

連翹ゆきやなぎの類

出生枝先靡垂るものハ何れとも右の両体ふ挿べし

但し懸流ふ限らず釣瓶手桶等ふ此風格格別取合るのなり

○乱流之圖

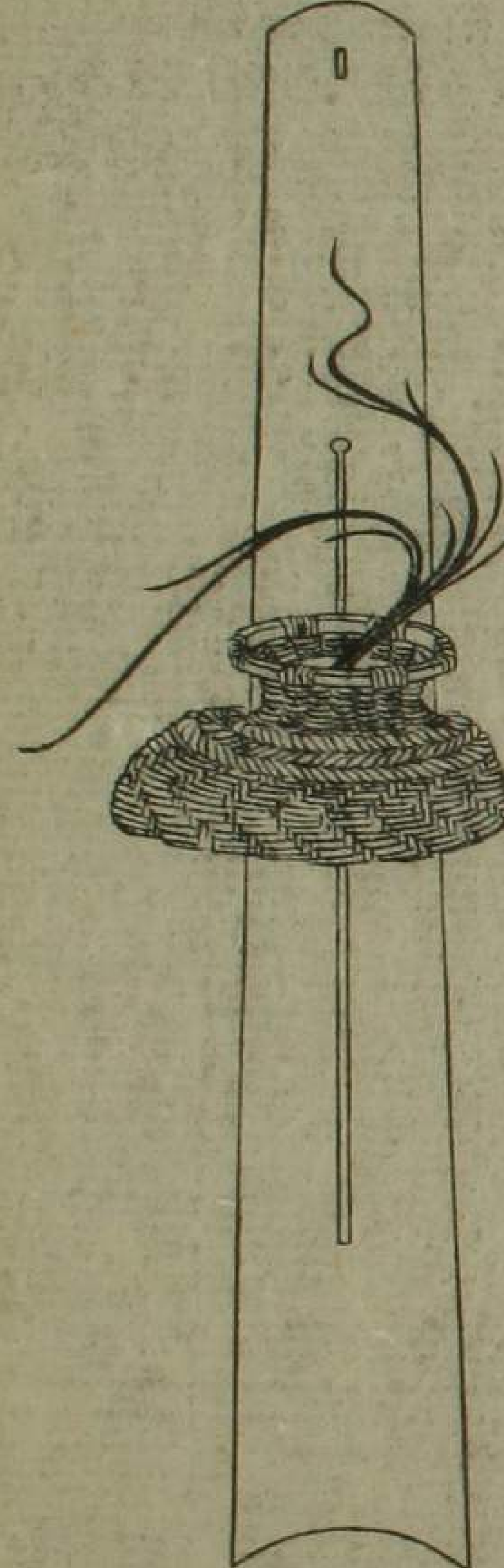
乱流しの体ハ蔓物ニ限るなり紫藤牽牛子つる梅もどきの類
何れも此風情ニ挿こと也但手附の籠ニハ蔓ものを入ざる事
御當流の古傳也今図する所ハ手籠の撲子あれどもこハ篠竹
といへるものニて蔓ものを入る節
別ニさし添て用ゆる具也尤口傳あり
又柴萩等を用ひて
風情をなす事も有べし

○蔓草ハ花葉ともにその
生ひ出たるごとく見ゆる
花器より別傳あり

蔓ものゝ纏ニハ其本性ニよりて右旋左旋の差別あり右図ニ有所ハ左旋の纏
様なり凡春分より秋分の比まで生長するものハ右旋なり又季秋より春分ニ
至り陰冬ニ衰けるものゝ或ハ木ものゝ類ハ何れも左旋なり但藤などハ白花のもの
右纏し紫花の方左纏ニて又羊乳ニも右纏左纏のものあり又北五味子等ハ各其葉
凋落し春新葉を生ずるものニして左纏なれバ各其性容を正しく明らめ知る
べきもの也

右真の相靡并行草六体の規則二重三重等の器ニ應じ其變化窮
なしといへども猶轉格の準縄となるべきものゝ五体を左ニ拵へたれ此十
二体の規則を深く習熟すれバ何程異形の花器又難枝難花ニ向ふとも
奇活自在をなし全くなげいれの事なし將釣瓶釣船等の趣も大吉此
規格ニよりて風情を為べし但釣船ハ出入遠近泊船等の差別ありて尚習事ニ
早体しく略傳とハいへども置たれバそれと見て會得すべし

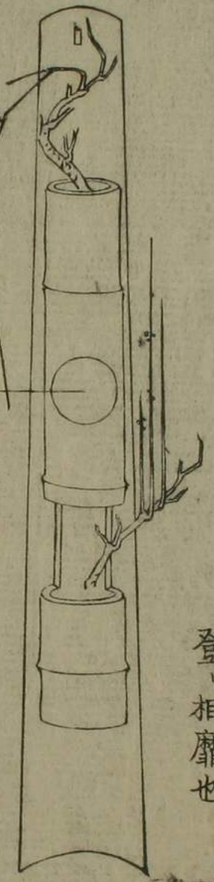
○登り載靡之圖



二重切三重切等の上或ハ船の類此花体最よし

○上登り逆靡之圖

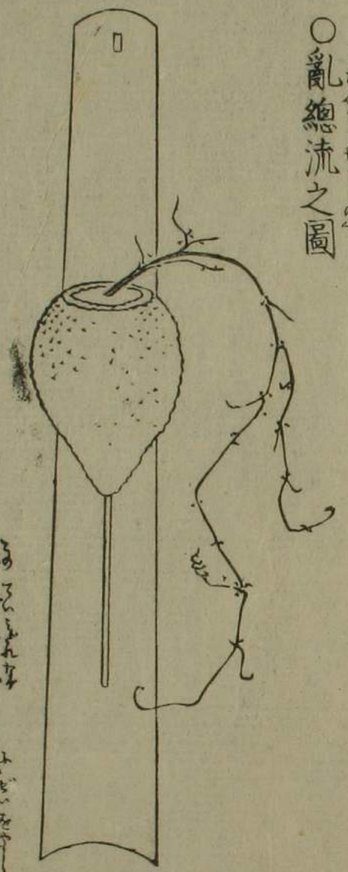
下行の相靡ゆく水の勢ひたる体也



○上登り大流之圖

下登り相靡也

圓相の中へ山茶水仙の類を手ごろく約かふ挿べし



○亂總流之圖

此体亂流の風情難竹用ひずして挿入る姿也尚假枝を用ふる時い差別なり

○濯流之圖

此体惣流の体を木の枝ゆく挿時の風情也水の流れ行くなるる物ふれ濯勢ふの意ふ〜濯流ふなり

右十二体の規格書院會席等ゆく挿くるに美麗を専要とすべし。茶室草庵等ゆく拋入れたるに佗を主とし幽雅の体を顯すべし。是等の餘情く花枝前後のくたくき等ハ口傳ゆくざるべ委敷明かゆ。此花体ゆ美麗を顯すに幽雅を具するに唯習熟の術ゆ有のミ

懸瓶之釘之事

○床の懸瓶の定むる釘くいゆ中央の胴釘く柳釘の二つのミ也今床柱ゆ有る釘と懸瓶の釘く心得るハ誤ア也此床柱の釘ハ懸くて客の休息するくき烏帽子を懸置釘なり。此をゞ〜けいふ事源平盛衰記ゆ見えくるゞゆ伊勢貞丈翁の説なり又是と但し婚禮の節抔ゆ相生の守りゆくいを懸る事なゞ有て。守り釘くもいくなり常ゆハ香佛抔ゆ假アゆ懸る事有べし。併此釘ゆ瓶を懸くく花を挿こもいゆ古き事にく。茶室ゆてハ別て是ゆ花器を懸る事定法のごくくなりぬ今ハ座敷向ゆくハ此釘ゆ瓶を懸くゆ。めゞなりそう。まゝハ有れゞ書院の床ゆ此釘のくなゞ凡く掛瓶の釘ゆいるるのなくゞもるる貴人方にくハ茶室の外懸瓶を用ひたるまゝ事にざれバ祝儀向なゞらゞ禮儀を正くるに節ハ必思量すべき事ゞゆ。（但茶室ゆて祝儀の節なり共用ひくるゞ）又床脇の上座の方ゆ柱ゆ釘打事にり。是ハ短冊懸抔と懸る釘ゆく近世のるの也是ゆ支くく花瓶を懸る事にるべゞ。床の銅釘ハ瓶を懸るなめの釘也又柳釘と云ハ靡き垂るるのを挿時ゆ用ふる釘ゆく。柳ハ垂るるの内ゆく最上のるのなる故かゝなづけたるるの也又朝貟釘とも有。是ハ利休の物好くく草庵ゆ限る支也。此外ゆ釣船の釘なり早教諭の二編ゆ著し置たる故ゆ因ゆ云今他家の書ゆ懸瓶の花を本源くく

置縣の極と論じあり懸瓶の竹器と禁じ〻他の竹器ゑ切方の墨法と及られ抔其誤り甚しきの也
此書院ゑ懸瓶の釘のなき一条ゑよりてゑその畧儀なる事の確證なるべきものをや

右懸瓶花体規則變化之傳畢

花配起原并時世沿革之事

附 抛入名義之事

○花配い花形惣態の締ゑ〻〻根元なるべれば枝葉整ひべし。故ゑれを最要〻〻瓶花の籍ゑ擧げるべし。其流徒こぞつて是ゑ心と盡さいべし。いまだ其的論なるものを見ず。依て當御流ゑ傳ふる所の留方の要を左ゑ著し〻〻初學の爲ゑ便なんとす。

さい花配の諸説まちまちゑ〻〻古へ冠の芽を留なるを起源也や。又い琴柱を始め〻〻或い失笘の先を折添留し抔其義論多し〻〻

いべし。何も正しき證しのなき一家説のみゑ〻後ゑ附會せし〻〻なるべし。思ふ古へかるいる絵しき事い有まじ〻〻そ〻ろい余り汲つ。

青山の御家ゑ此説〻〻の御傳のなきゑそ〻て炳然かり。其基と古く尊くせん〻〻種々の強言とのいひなせ〻〻、活華の儀なり出〻何ども今諸の流御家〻〻いろ〻い我

青山の御家の外ゑい假ゑ〻〻事ゑ〻〻、御家の古き御傳籍ゑ見えぬる事いみぢかし。言のこ世ゑ多しまし〻〻此花配起源抔の説ない〻〻〻〻き妄言なるとや。今茶家ゑ抛入といふ辞いつゑ〻古き言葉なり。此抛入やいつ事ハ千宗易小田原陣中ゑ〻夢子花を入る時ゑ柄ゑ〻根元をけ〻〻貫き水盤へ投入るより始るといつるも最附會の説ゑ〻〻取るゑたるべ。此なるべるやいふ辞も古くよりのものゑと精くせべ〻〻唯磊落ゑけ〻〻置辞ゑ用ひ〻〻物をなげ捨る事のみゑいひ〻〻げる。

有正幼年の比此抛入れの義と考へ〻ふなげいれい靡入れの義ゑ〻花体を靡く入る故ゑなげきのさとけゑ通るいと畧〻〻なげ入れ〻〻轉ず〻〻

なるべし。是より思ひ〳〵に附會なり。かゝる花を挿事は上古より行はれず。今のごとく挿法の嚴なることはなく。唯手折なる儘をうつす。併し今の抛入れのごとく此義を叶へるもをり〳〵

瓶ふうつし。花の色香を旨とし愛玩ひたすらなり。瓶ふ花を挿いつこは古今集拾遺集等ふ見えたり。伊勢物語ふ客の設ふ花を中昔の頃より手輕く入たるを唯俗言ふ抛入るとも見えたり

なるべし。今猶ひ傳へ唱ふるふそ。鎌倉ふ北條の權を執るに末より。室町殿の頃ふ成いたりの出來たる。鹿苑院殿の銀閣ふ退きて。風流を好まひしより。活華立花盆山茶香等の伎し專ら行はれ來つ。床の事は續後編床飾の条ふ委しくいへり。又活華盆山茶香等の起原は各遲速ありしも室町殿の前後ふ成りたるに世ふひろくなり我御家の中祖の君ふこの頃ふ成りたるを

さればば瓶花の法則嚴ふなりて活華を抛入るの二構も出來たるなり。さればば古へは花配なく。今の文人風抔いるはまふ挿入るゝ。まかしまれふ一文字。杈等を用ひ。留なるこふも有なり。今茶室の花は花配なく古へはまふ挿入る故ふ猶抛入れと唱ふるも此義也。今の世は諸事礼義嚴ふなりそれが書院座敷ふ設なれば抛入れと唱ふる事有べからず。茶室は礼を正ふ

但茶室の花は。口の廣き器ふ一文字を用ふるなり。強て花配なの起原をいへば此一文字を根原といへばかりそれ。古へ花配なき時は折入れいひ。根元を折留たる故ふ抛入れいひべし。折入れいへるも是まも妄言なり

此一文字より十文字なり。又換へて杈なり。松葉配なり。尚ふたゝび配なるべし。漸元禄寶永のころより。寛政文化の頃迄の事ふなんありける

留方圖解并花配用樣滋器心得等之事

○文雅瓶花之圖　今俗おゝふ文人風の挿る也るゝの贊おちる体大旨かくのごとゝ

○折入レ留之圖

折入れハ他所へ花所望せゝゝ節圖のごとき花器ゝゝ花配なゝ留りがき時抔ゝ用ひゝ即真を添る事なるべし

○此折入もゝ強く留るもの但悉枝二三本ゝ餘ハ留ずに

○花配なゝ拋入之圖

配りなゝしゝ留るゝハ圖のごとゝ二夕所の持合ゝゝ

此所やゝ前へ撓る也

此所ゝゝ配なゝ留

此所張なる火鉢杯をかゝらぬるのもの

此所瓶の底ハ富る時ハ留る但小木ハ底ハ富で留るもの

杉ゝ木を留ノ其餘を是ハ添せゝ留るゝ、

掛花の類をゝ器の口ハ所ゝゝ前へ靡せゝ撓置ゝゝハ速ハ留るもの也

○一文字留之圖

圖のごとゝ口の廣きゝのを一文字を入もゝ留るもの是ハ右の花配なゝしゝ留るゝ同意なり但一文字を強く斜ハ撓ゝ

圖のごとゝ留ると半月留ゝいふもの

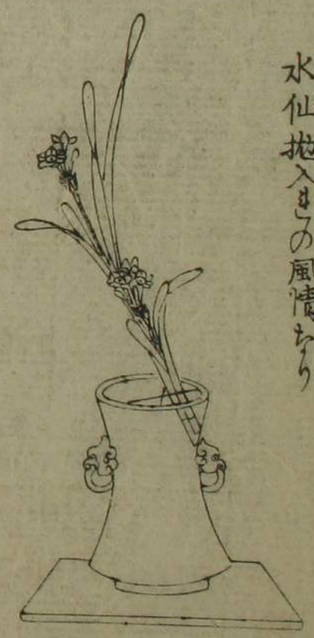
如此一文字を結ふ用る時ハ留る安

○十文字留之圖

右の一文字より十文字と換る事
まべく世ゆるるの自立ち
なるべき理ゆく必陰陽の合く
成就ちるれば此十文字ゆくく
たしかゆ留ちり

此ごく十文字ゆまた後より一文字をかけく留ちと
扇留ゆくいふちり　但し扇留ち青竹を
以く製もべし

右十文字轉じく枝ちり其枝ゆ廣狹の差別ゆりく根締ちの
九くちりゆく前後ゆちろひく留ちの二品ゆりちり



水仙抛入れの風情ちり

○枝ゆく九く留ちる圖

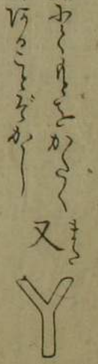
枝ち内くをを丸くちり
用ゆれば留ちるし
併しこれ初心の
ちるゆり

○枝ゆく前後ゆちろへく留ちる圖

配ちへ花留しと
根締しと又花配りと云

枝の木ちるものかくきちの又ちへる
ちの杯耳しべ木槿の木ちるを九はし

右のごとく年うつり花配漸備へられば亦是ふ附會をなし瓶中を五行ふ配し其外種々の理をそへ或い瓶の傍より挿又中央ふ挿四候ふ挿所も換る抔いろ〳〵強言をなせるはかり是皆正き傳へふいはること也今御當流ふ〳〵松葉配へ叔とうたへ配やいろ〳〵と專らふ用ふ此松葉配といへるは



圖のごとく九木を割懸松葉のごとくひき用ふると云但し松葉配へは千代の緒ふ〳〵とかゝく又結ひ〻むすなる是い故實はるこゝかし

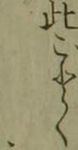
圖のごとく割懸〳〵製〳〵なると琴柱とうぶこい前を結ひ〻むる事なし此琴柱の〳〵ふ御當流ふ〳〵い好まゝ是を用ふる場ふ至りては則叔を遣ふなり但し松葉配りい割懸るものなれい留へるく叔い九き枝なる故よりのゝ留りかゝまつ配りふ多ふ

松葉配ふ〳〵留なる圖

此配りの木い木槿り歴木の類まゝ〳〵木理の通へなるものと撰〳〵用ふべし

○松葉配へふ多〳〵向ふ附ケ也但花ふ〳〵い隅附ケ遣ふ

又うたへ配へ〳〵いふ叔の



此ごとく三條なるものとり起へ〳〵ふ〳〵

凡花配へのはゝ〳〵はまゝ〳〵にはれど古義を失へば〳〵殊ふ留へ安きいこの配へふ次りのいなき也但製様い筋のとく通りなる木を三ツふ割〳〵即二筋ふ花を挿なり尚この製わ口傳なり

三極ゆゝ留たる圖

三つまたゝ八重またゝて

ふたゝび配りて云我　御家の先君根留りの伎ふ深く御心を尽し給ひ手ずゝ此配りの製を考興しまひしなり其後別く當御流ふ專らと用ふることふたなりぬ但此配りを用ふる功ふることふ最多し其木ゝ草を取合ゝ挿ふ必此配りを用ふる時ハ水際の差別殊ふきハ立ゝいとゝ見ゆるの也又花とちやもふ留り安ゝ自然

養をたすけ又た古義ふ叶ひゝ根締りの美麗を顯す等餘ハ猶此配りを手錬しゝ其妙要を會得すべし但ふゝ配りハ枝數多く挿時ふ用ひ少き時ハ松葉配りを用ふべし

二重配ゆゝ留たる圖

此配りハ二筋なるゆゑ右の方へ挿枝ハ右の木肌をくゞる

此二重配ハ草木ともよ數本ハ右しゝく自在ふ留る也

左の方へ挿枝ハ左の木肌をくゞりよゝ締るのなり

近世右の二重配りふ據ゝ溝配又藥研配りといふやうけやゝき配りを

なるゆへ此溝配りとなす

かくの如く製したるものゆへ藥研配りを

此ごとく丸木を割て上を廣く下を狹くなりて中ゆへ竹木

或ハ鉄のうすき板をはさみ前後をはりぶねゆへ縛て是ゆへ根元を削て

一本ずつ挿るの也是ハ配りの本來を失ひるものゆへ溝藥研等の名を負せ

たるまいとぎひとこと也配りの前後を縛るハ瓶史ゆへ忌以繩束縛や

いる根を縛りたると同じこと也是等の配りハ假りゆへ用ひまじき

事ぞかし・猶此外ゆへ箱配りとなるハ同様の製也用ふべし又引配とも有是ハ丸木を

鋸を以て引切るの細き筋へ花を挿るの也拙しいへども藥研配等ゆへ

ぶれハや勝れたるものなり、御當流ゆへハ右の松葉配・杈配・二重配りの三等を用ひ

其餘古義正しいへども用ふる事なき也又相生配とも有是ハ婚礼ゆへ用

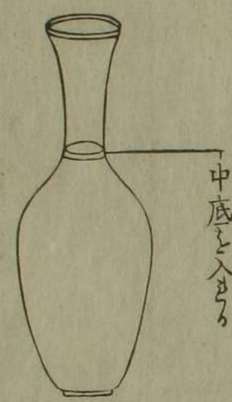
留るハ此相生配りと右の外種々の配りなれ・大旨是等の配りゆへ

○凡て花配りハ花を留るの要めゆへ花体ゆへ應じ器ゆへ應じ其の

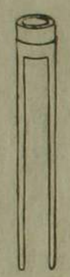
留り樣一定なるべし・いろ程花体を工ふもいへども・根元留らざる時ハ

その功全からざれ・前ゆへいろ留方を常ゆへ克習ひ深く心を盡すべき

こと也・尚又幼學の爲ゆへ留りがたき磁瓶の差別を聊左ゆへ附錄ス



中底を入るる



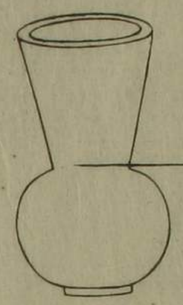
中底ゆへ此ごとく竹ゆへ製し落し入て用ふるもよし

圖のごとき磁瓶ハ花配りとして留りがたし・陶器なれ・うたく入ること難し・底逆花と挿きハ留れ・丈長きものゆへ・うつくしけれ

ども尤草木ゆへ・ふるものゆへ手がろく留りとて大ぶりゆへ重くなるゆへ

留りがたし・此時ハ圖のごとく瓶中ゆへ中底を入也是ゆへ當て入る時ハ速ゆへ留る

杖の重しと一文字ゆゝ押つるなり



無閑人を用ふる時ハ此所迫落し入るゝ遣ふべし

圖のごとき磁瓶もまゝ留るべし、杖ゆゝ留る時ハ前圖のごゝ中底を入るゝゝ留るなり、又二重配りゆゝ留るハ中底ゆ限らず、一文字を配るの下へ入るゝかゝ留るなり、もべゝ配りのごゝ留りがたきこの一文字ゆゝゝ留るものなり、

圖のごゝき器ハ前編ゆ見えたるごゝく、薄板を落し入る哉、又口のひろきハ奥ゆ圖ゆる無閑人を入れゝ留るこゝゝ

もべゝ底のひゝきたるものハ早ゆゝ出

初編ゆ著したるごゝく薄板を落し入れて配るを留る事ゝ

○此姿ゆゝかゝうねなるハ中口ゝゝ又陶器のものハ本蕪ゝゝ青磁の作方多ゝ

磁瓶或ハ竹器の類内の塗たるの配りもべるて留らぬハ締賦木を前後ゆ當ゝ配るを収むべし。其締賦木ハ今西洋舶來のコロツフやいるるの甚よゝ

右の外方形の花器ゆゝ杖を用ふる事ゝ。松葉配るハ留るハ但し銅器のものハかたゝ配るを入れゝ損ずる事なれば松葉配りゆるゝ唯陶器ハもべゝかゝゝゝゝぐれがゝきものゆえて、杖をもちふるとゝゝ

又塗たる花器ゝ右の締賦木を用ふる哉或ハ前後ゆ紙を當ゝ

ひろいハ陶器のものハまた薄き板を當て配るを収むべし。かくもれば

もべゝ留らぬゝゝ

平鉢水盤等の瓶中留方之圖解

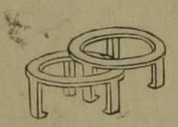
○水指ふ火架留之圖

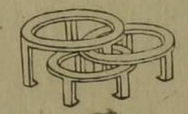
火架ふ〻留るハ一文字ふ〻留ると同じ意也、

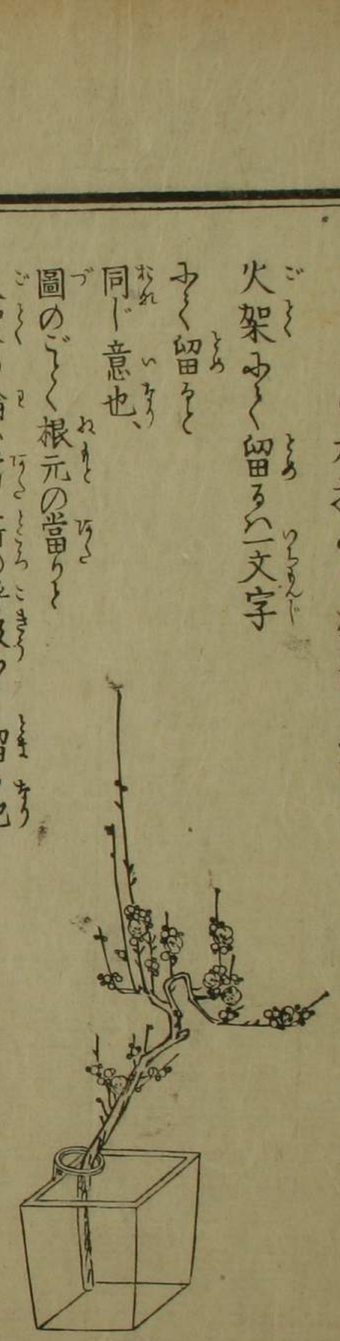
圖のごとく根元の當り〻火架の輪ふ當る所の呼吸ふ〻留る也

右ゝ火架一ツふ〻留なる圖也、猶二ツ三ツも圖のごとく組合〻遣ふ事有る〻

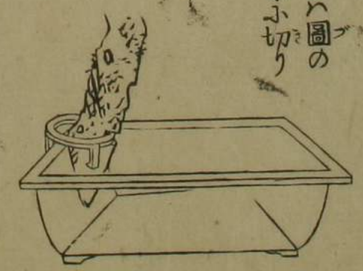
但し ごとくゝ夜學の具なる事ハ早敎諭ふ出せり







太き木なるハ圖のごとく火架ふ切り〻留るゝ



○蟹留之圖

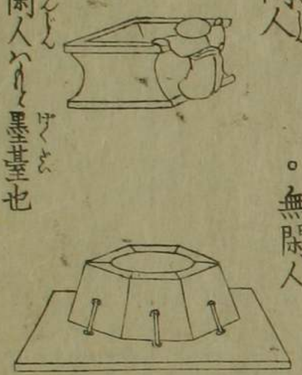
蟹ハ足を器のふちふけ〻留るなり、向ふへ懸る〻又横ふ懸る事ハ

なるなり、時宜ふ隨ふべし、

蟹陰陽の置たゝ早決〻ふ

○一閑人無閑人之圖

○一閑人　○無閑人



一閑人ハ墨墨也

○枝の屈曲ふより變化なれどもこれ筆工ふ盡がたし大旨圖ふよりて考弁ふべ

太き木なるの抔ふ配り居りがたきふ、圖のごとく板ふ仕込〻紐ふ〻留る也、

但し次ふ図なる井筒ハ隅ふ〻板へまさむ也、

井とのごけ閑人なき故ふ無閑人〻ふ

此蟹ゝ陽の置たる也

○無閑人を留たる圖

幹ふくきりのを留るを
圖のごとく木肌を切り
こみ〳〵収むべし、
但根じめ抔を添るべし
この幹の根留るを配りを入れ〳〵その配りを
根じめと挿べ、かくしたれば幹もいたるを留るの也、

○二十

○双井筒

なべび井筒を
ふと蘭がなの類
の水草を挿折
を用ひべし

○筒井

筒井は取扱ひる
無閑人を准じ
用ふべし、但菊
だんの類を挿
節を常のごとく配りを入れ〳〵花と挿べ

大小ありて花を
應じ用ふべし

○瀋留之圖

瀋の組方は早教諭を
出せり〳〵べく瓶を懸〳〵
留るものは隅を懸〳〵る留り
安き也但瀋は組方をよりて
瓶の中より挿事有也

此所砂鉢の隅懸ル

○環旋水留之圖

環旋水の穴へ二本
二本或は三本挿也

環旋水は水草の類を留るを
詰りの抔込べく〳〵穴廣くして寛き時は
根元を少し折て挿べ、風吹の席と
て流る事なれば是をもち折入れ
の法なり

右花配留方之傳畢

右は〳〵と記るべし、餘の花枝を以て手錬すべし、なほ
鉄留砂利留等は別紙に早出し〳〵を著したれば爰に略せり

二木三草五葉之辨并准種之事

○草木誓古專要のものハ前ハ桂月園叢雅撰ぐ二木三草五葉と挙たり其二木三草とハ前編ハ見えて梅山茶の二木菊萸子花水仙の三草ハ〻〻五葉とハ一葉玉簪花豪吾胡蝶花萬年青乃五種をいへり有雅これを研究するハ二木三草ハ尤修行の肝要とすべきものなるが五葉ハいまゞ盡さゞる所有なり又五葉の内玉簪花と豪吾ハ一葉ハ准ずるものゆゑ胡蝶花ハ花ばやめ鳶尾等ハ類〻〻蘐子花ハ准ずるもの也はれば一葉〻〻萬年青とそ青〻手錬すべきものなれ此二種ハ四候ものハ生榮え〻〻最世ハ多きものなれば專ら是を習熟〻〻餘ハ此修行と以て推すべし又葉を青〻するものハ常盤木竹とそゞめ水草の類猶多ゝ

そハ同類別種の差別とゝ辨へ置く其主なるものを專ら手錬すべきなり

○紫苑玉簪花豪吾是等ハ一葉ハ准じゝ何れも葉と組ゝ形態を調ふるのなり車前草の類葉を組るのハ種類なり

又曇華芭蕉紅蕉鬱金蓬莪茂高良薑良薑等ハ同じゝ

ゞゝんハ准ずるものゆゑ是ハ一葉で葉と組ゝ体をなるのハいとゞなり

○萬年青ハ品位餘種ハ秀〻〻性容是ハ類なるものなり

○常盤木ハそハ松と冠〻〻五鬚松ハ准ずるもの最多なり華陰松

栢扁栢檜栢刺栢槙椙栢柳柳伽羅木柾の類何れも松五鬚松

の意と以〻修行すべし尚常盤のものハ是等ハ葉と旨〻なるものハ矮檜等性容こゝなるものハ

花ハ用ふるものハ數種なるゆへ今牧挙

なるものハ依〻爰〻略す

○竹ゝ一種別品ゆゑ淡竹 苦竹 孟宗竹 金絲竹 人面竹
篁竹 紫竹 鳳尾竹等の類その差別ありしかれども葉の疎密
ゆゑ風情をなす也 尤竹の修錬をもつて草木ゆゑ其枝を及ぼ
らの數種なり

○水草の風情いまゝ別格ゆゑ蓮 萍蓬草を以てその主ゆゑ
澤瀉 蒲草 一瓣蓮の類是ゆゑ准じ性容を調ふるのなり なほ
水草の種類多しといへども葉を旨として風情をなすのいれる也
さればゆゑ今此五種竹 水草 常盤木を以て稽古の專要ゆゑ備ふ 但し蘭
吉祥草 山蘭 のらん 芒 芦 荻 かるかやの類 これゆゑ次 此外常盤木ゆゑ
萱草等 何れも蘭ゆゑ准ず 何れも芒ゆゑ准ず
しかれども常盤木ゆゑ准ずるもの みづき木 ゆずの類 又櫻 楓ゆゑ つの類其
葉を旨とするなり

性容別ゆゑ葉を專とするものも有といへども 尤べく右五種を
修行する時ゆゑ自在を得るものぞかし

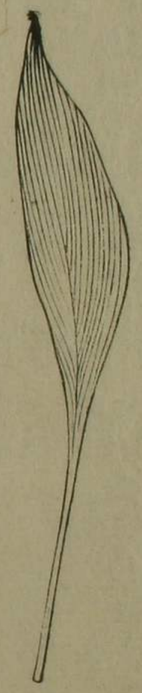
一葉本性陰葉陽葉之事 附 組方之傳
准種五草之圖解

○だんゆゑ本勝手と非勝手の風体ゆゑ 先第一ゆゑ葉の性の陰陽を正
だし 其本勝手といへゝ陽の体なるゆゑ陽性の葉を旨とし 陰
性の葉をまべく又非勝手といへゝ陰の体なるゆゑ陰性の葉を旨し
ゝ陽性の葉をまべく挿なり とを正しく備ふる時ゆゑなるべし
性容をなすもの 全体規則速ゆゑ調ふるのなり 但陰陽の葉ゆゑ葉の
形態表より見て左旋なるを陽ゆゑ 右旋なるを陰といふなり

○陽之葉

葉の形態表うら見く中のすぢより右の巾狹く左の巾ひろき則左旋のすぢなり

○陰之葉



陰の葉のすぢ〻い中の筋より右の巾ひろく左の巾せぜ〻是則右旋のすぢなり

○萬物北を根元とする理ハ既ふ先ふいくれば弁へ知るべ〻

右葉の性ふ陰陽を定るものい諸鳥の翼の形容ふよりて其理を窮むべ〻

陽

鳥の左の翼羽ハ此ぐ〻く中の筋より右の巾せぜ〻く左の巾ひろ〻則ぜんの陽の葉〻おれ〻姿なり

陰

同〻く右の翼羽ハ此如く中の筋より右の巾ひろく左の巾せぜ〻是まるぜんの陰の葉ふ同〻姿也

すべ〻く禽獸草木ふ限〻ぐ萬物左を陽と〻右を陰と〻このゆゑふ左右の翼の羽のすぢたふぜ〻んの葉ハ符合〻なるを陰陽と定るつ。最陰葉陽葉〻ふ地上一叢の中ふ生ひまぜ〻ぬ暖陽の地ふハ陽の葉多く陰濕の地ふハ陰の葉多く生ずる事天巧自然の理ふ〻く敢く

僻論を以て爭ひ疑たき所也　尚弓術の甲矢乙矢ゐくも此陰陽の性理を
ひとしく確證あれば愛ふ者く

○本勝手陽之体五葉之圖

右本勝手の体ハ陽の葉を主とし、陰の葉を交たる陰陽全備の風
格なり　但し本勝手の体ハ陰の葉を主とし挿たるも、幼学の眼ハ見る時ハ左の
差別なく見ゆれども此形態を會得したるものよりしく見るときハいと
見ぐるしきものなり

○葉の表裏を陰陽とするハ自然の陰陽の性に反もる也、
早教諭又活花図大成の附録ハ委しく著し置つ

○逆勝手陰之体七葉之圖

圖のごとく陰陽の葉を正しくし組時ハ花体聊も滞なく自然
正風体ハ

此ごとく葉の表裏をなさば陰陽を混じ
組ときハ蓮荷のごとく重なりいとく
見苦しきものなり、能をなすべく考
辨有べし

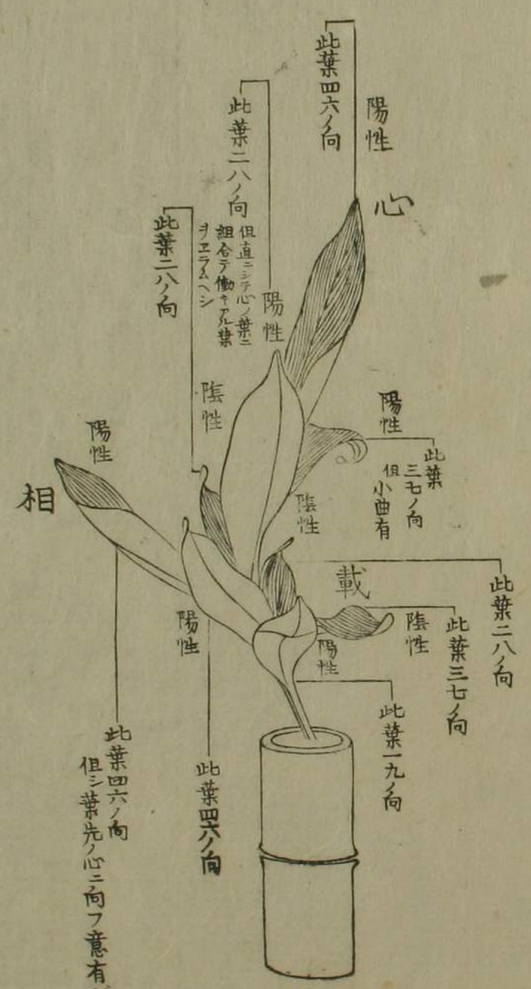
さべく葉ものを挿ふ數少く挿ときは葉のむきと一九より二八ふ見るべし

一九といふは九分平を見る一分横を見るといふなり　又數繁く挿時は三七二八といふは八分平を見る二分横を見るといふなり

より四六ふ見るべし　三七八七分平ゆく三分横四六ゆく四分横ゆく六分の平をいふなり　葉を真横ふ見ると真平ふ見る事を忌む最葉ふたゝきのごとく曲なるをいふなり正しき容ゆく葉の備へ全体整齊なるゆまをいふなり葉を重ゆ葉先ゆく曲をなるいふ風格甚いやしたゝへ數葉けれ入るゝ曲葉ハ唯一二葉を過ぶ自然の容ふく惣体過不及なく風情を調ふ事を旨とすべし

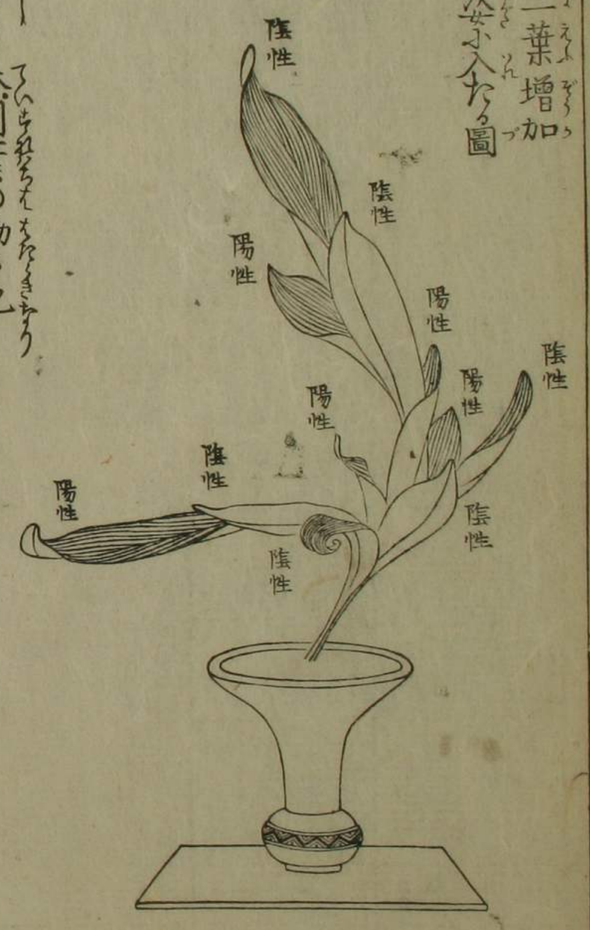
○本勝手陽之体九葉之圖

右の七葉ふ二葉を増したる活体なり、但し心ふ三葉、載ふ三葉、相ふ三葉を配する事即九葉の定格なり



右葉を組ふ心と相ふ遣ふ葉い大葉中葉をちゝむべし　又載ふ置葉を小葉を用ふる事よし　最葉先い何もも同ど向ふちゝざる様心得手錬すべし　但葉先と少しふくも切ちゞめ抔ちる事ゆるゞべし

○右九枚ハ二葉増加
草の姿ハ入なる圖



圖のごとく挿る体則葉の働き也
但陰陽の葉ハ花体ハ應〳〵差別有〳〵各圖ハ〳〵會得ゼバ又雅整
体變化の規則ハ陰の体ハ陽の心葉を用ひ陽の体ハ陰の心葉を置事有是と反乗
の格〳〵ハ尤働有体也併手錬熟せざれハ是を挿得ゼと則十五葉の圖左ハ記す

○本勝手反乗之格
十五葉之圖

右の葉組ハ唯定規の大旨を
記すものゝ最四候ハ應〳〵葉の性同じ〳〵ゞ三月の季より四月の始と
一葉の時〳〵此頃花と根の旁ハ置又嫩葉を生ぜ〳〵時ハ習有凡〳〵器ハ應〳〵
千變万化極りなきものも尚委〳〵ハ一葉百態圖解〳〵へる書ハ花圖數体詳也
一葉ハ〳〵んの正字ハ〳〵過〳〵文化の始め豫又の柄崗〳〵撰たる百瓶圖譜〳〵へる書のいるとゝ〳〵百瓶の
中〳〵尚まと五十圖を撰出〳〵天保の季年ハ新ハ又五十圖を撰添旁ハ其義解を弁へ置たる書なり

○一葉ふ准ずるもの五種の圖

玉簪花 五葉 二花

玉簪花紫苑槖吾の類ら葉の組方ぢんふ同意なり。花ハ葉の向ひ合たる中より出ずべし 但車前ハ玉簪花ふ似て花の性葉の中より生ずべ。偶生の傍より生ずるものなれば是等ら其性容を觀究し〳〵。右の葉組ふ准じ挿習ふべし

槖吾 二花 七葉

岡萍蓬杯ら大音此つくぶきふ准じ〳〵挿ふべし

紫苑 七葉 三花

法ちんハ葉を用ふる所へ花を置て風情を調ふべし

紫苑ぎくの葉の性弱ものなれば〳〵ごとく扱ひ〳〵し撓る葉抜ハ殊ほ〳〵強きを見立て用ふべし

花葉撓方等ハ早教諭ふ著しるしなる麦ふ暑ハ

○曇華いぶきんに准ずるものゝ二本三本五本七本まぜ挿葉の自然とそなはりきやくとなり此花仲夏より初秋にかけて世に多く有るかちやに安きものなれば芭蕉紅蕉等の風情を知りまづ是を以て手錬なべし

曇華 三番

此花に同じ類のものゝ何れも葉の大小取合〳〵風情をなべて〳〵の性容并挿方撓様等早ち〳〵に委〳〵記しなれば略〳〵右一体を顕すべし

蓬莪茂 三番 二花 七葉

芭蕉うんせつ所に此風情に挿てはし葉のむき様いぶきんに〳〵く真平を見る事なり

○高良薑 良薑曇華ニ似テ葉厚ク強シ。故ニ葉先靡クコトなし。葉ハ前後のまたがりきゝ七三ニ見る様遣フベシ。但シ數ハ二本より五本迄挿なり、何も花図早ハ〜

ふきなせり

萬年青性容之事 并葉組之傳

○おもに陰性のものゝ隆冬衰へざるその壽を以テ名とす。三才図繪ニ出たり

專ら慶讃ニ用フるものなり。其性容四候こゝろ〳〵餘草ニ勝れたる所あり。葉ハ左右なびかふ偶生ス春心中より苞を萌シ。其苞の中より嫩葉を發す。嫩葉生長するにしたがひ苞ハ漸〳〵ひらく。その苞の内ニ蓓蕾を生ジ心中より出るがごとく見えて。新葉ハ舊葉の間ニ花をひらく。即六瓣ハ〳〵黄白色也

但シ瓣厚ク謝落せず。因ニ云水仙の性も四葉偶生のものゝ心中より一莖生シ六瓣の白花をひらく。四葉六瓣の陰數をつゝしみ慶讃ニ用ひ〳〵ものゝ誤まり陰極ル陽萌ルの理ニこゝに嚴寒の中ニ花を見るをもつて仙骨の名もあるなり。おりふし次〳〵祝筵ニ用ひくよし

新葉立延舊葉ニ嗣ク盛ナるにおよんで實を結ぶ。實を結ぶニ及んで即胎中ニ後芽を含む。これ翌年の嗣芽ハ〳〵なるなり。かく嗣ク絶ざるやうにとの喜事ニふれを用ひくし祥瑞の口號ハ秘傳花鏡ニ見えたり

舊葉ハおのゝ枯腐ス。枯腐ス用ひくハ挿ざるなり

萬年青性容之圖

花ハ新葉〳〵苞との間ふ
こんをさゝむ

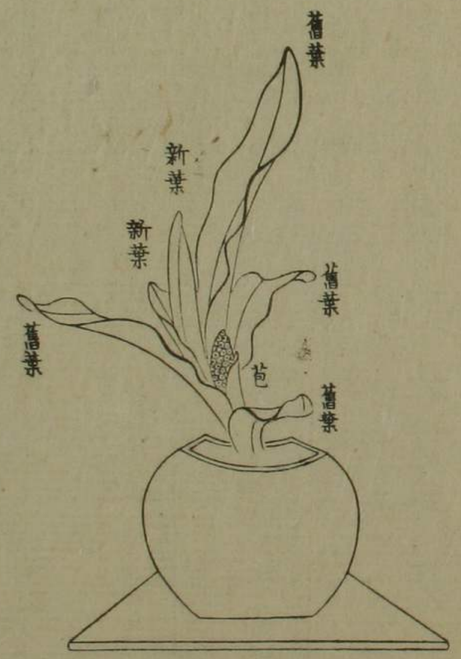
苞ハ二葉なるもの常性也、
二葉なるものハ初生の
苞ふ隨ふ〳〵莟蕾を生ずる也

本草新編云人家種此
花更能辟祟云々

葉ハ新葉〳〵舊葉や〳〵前後左右ふ年を隔〳〵更り相偶〳〵〳〵生ずるもの
なり。瓶花ハ是ふ據〳〵〳〵葉を組こふ〳〵最よ〳〵

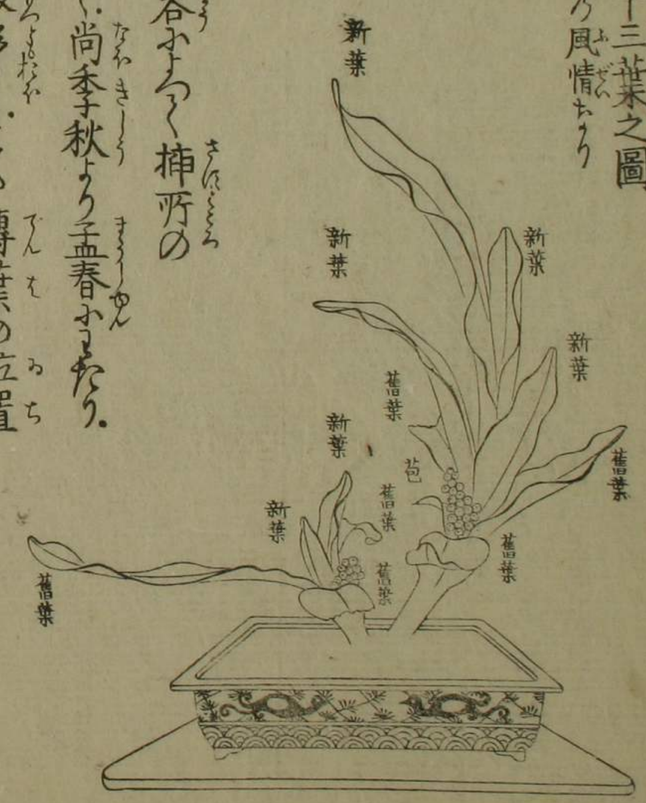
○本勝手七葉之圖

花の時の風情なり



圖のごゝ〳〵性容を委〳〵〳〵辨へ得〳〵瓶中ふ挿ときハ自然の風
致を調ふるのなり。但〳〵花のやゝきハ枯葉腐葉等をまゞ〳〵挿事
なるべき〳〵尚口傳多〳〵

○非勝手十三葉之圖
實の時乃風情ちろ



兩体葉組の圖ハ性容ホよく挿所の
大旨を記せるものゝ尚季秋ろ孟春ホ
季候ホ應しく習最多し。そゝ傳葉の位置
新舊の活意等ハ悉く口傳ホ以ゝざれば辨へがたき所ゝ。是い
御當流ホおいゝ重く秘せる傳へなれば爰ホ省ろ。但萬年青圖解や

いろ書ホ數体の規則を著しなれば爰を閲ゝ形狀の大綱を知るべくちん。
右誓古專要の葉を旨とせるものを考ゝ内一葉萬年青ホ
二種を爰ホ著ハ。そゝ常盤木竹の類ハ性容悉く一なるべゝ
筆頭ホ及びたる省ろ。但ゝ常盤木の類竹の挿方等ハ大旨
類も數種繁多なるを以ゝ爰ホ擧げ。又水草の
校正活花圖大成の附錄ホ著ゝ置つ
附錄ホ記つ
したがゝと競花圖ホ照合ゝ其大綱を知得るべゝ
餘ハ早教諭ホ著
青山の花ホ下風世ゝ吹はゝくへなん千五百六万歳

活華手引　巻之二畢

瓶花者流各有其插法若心費巧取其姿態以供衆目之玩賞目謂之活花然而其活者豈能耐久乎終無不損之時又無不枯之理偶以其活久者不過十日或二十日久而亦久不足以為久也亦以謂必能耐久經百年而不變者則有一焉何耶插而罔之鐫而帖之不論春夏秋冬一花一木皆儲之於帖中雖非其花時而閑帖則其姿態現焉掩帖則其形跡沒焉以為有則有以為無無則豈不知其真有耶之矣

無耶要之畫其香而少之留其影而遺之異氣鏡花水月觀非實相觀者何遂其色香耶蓋言低眺窗之姿繁疫參差之態即瓶插者苦心之所在焉活存斯帖班真活花式也傳百年而去者一瓶之不可為式者也予愛瓶花而賦插法又將譬之乃贅一瓶以為跋

四時百種巧收儲姿態交妍永不枯休遜色香談實相瓶花圓好護真如

嘉永癸丑春

春樵德士

壽糸園翁所著活華手引種後篇成仗糸淨寫
焉糸固不解挿花之術然其言醇正殆於識古之道
豈敢代客所及手因倣然應其請點竄倣字助語
之失而淨寫以贈時嘉凡癸丑上浣

蜂斯園河北真彦識 真彦之記

糸寫花式図自第三紙至十八紙適會有故而不果遂仗
梅可圭生代写全其功如生者可謂能彌縫其闕也

蟻生文雄

活花式図自十九紙至卅一紙糸所代蟻生兄也用筆酒拙自視
赧然誇云代大丈斷者偽其手抄謂乎 梅可圭東蜂